6　マルコ・ポーロとダンテ[1)]

――ダンテの沈黙をめぐって――

マルコ・ポーロに対する‘ダンテの沈黙'は夙に知られる。ところが実は、『神曲』にジパングが登場しているのである。とこう書けば、いかにも奇異に聞こえようが、そう不思議なことではない。本当かどうか、では千二百年代から翌世紀にかけて、イタリア人としては宗教家以外では最初に世界史に名を残したこの二人の’旅人’の接点を探ってみることとしよう。

1　マルコとダンテ

まず、二人は出会ったことはあるか。直接面識があったという証拠はないが、間接的に互いに聞き知っていた可能性は極めて高いと考えられている。相目見えた機会があったとすれは唯一、死の直前千三百二十一年の夏八月ダンテがヴェネツィアにやって来た折のことであろう。その時の用向きというのが、アドリア海における海賊行為をめぐるヴェネツィア総警ジォヴァンニ・ソランツォからの非難と威嚇に対して、その頃寄遇していたラヴェンナのグィド・ノヴェッロ・ダ・ポレンタ公の使節として共和国政府と交渉するというものであった[2)]。一方、隠居の身とはいえ貴族の一人として、あるいは商人としての利害や船乗りとしての経験からも、祖国の生命線ともいうべきアドリア海をめぐるもめ事に、マルコも無関心ではありえなかったであろう、というわけである[3)]。

もっとも、古文書にみえる限りでは、ジェノヴァの獄から祖国に戻って以後は表舞台に登場せず、東方から持ち帰った珍奇な品々元手の細々としたけちくさい商いと、家の所有権をめぐる親族相手の訴訟沙汰に明け暮れていた、これまた最晩年にあったかつての「古今最大の旅行家」が、なお共和国の政治や経済に実際に関心を抱いていたかは疑問である。それでも、ダンテの文名すでに遍く、孤高の亡命詩人到来の噂は、あの狭いラグーナの街に広まり、議会と政庁のあったサン・マルコ広場にも程近い、リアルト橋を渡ってすぐ左手のサン・クリソストモ区は著名なポーロの館 Ca’ Polo に陰棲していた、良きにつけ悪しきにつけ同市の名士の一人でもあったマルコの耳にも届いていた、と想像して差し支えないで

あろう。[4)]

次に、そのヴェネツィアの名士をフィレンツェの詩人が聞き知っていた可能性はどうであろうか。かの旅行記がものされてすでに二十数年、ベストセラーのごとく写本も出回り、事実と信じるにせよ嘘ととるにせよ、「ミリォーネ」の名で広く人の口に上っていたし、その希有な旅の体験が評判となって学者や王候貴族、宗教人の間にも深い関心を呼んでいたことは、例えばパドヴァの自然学者ピエトロ・ダーバノが早々に直接マルコを訪ねて話を聞き、その報告を公表していること（1303 年)、同市に立ち寄ったフランスの貴族ティボー・ド・セポワがわざわざマルコのもとを訪れて写本一巻を所望していること（1307 年）[5)]、ボローニァのドメニコ会士ピピヌスが教団から命じられてラテン語に訳していること（1314-20 年頃)、などからもうかがえよう。ましてや、当時のコスモグラフィーの集大成ともいえる『神曲』を構想し、『水陸論』では南半球における海と陸の関係を論じるなど、地球の形状にも関心深かった当時最大の学者、また政治の世界でも活躍し、各地の宮廷や宗教界の動静から世間の俗事にまで通じていた当代随一のジャーナリスト、ダンテがかくも好奇な出来事に興味をもたぬはずはなかったであろうし、さらには、ボッカツチォ [6)]からヴィッラーニ [7)]まで同時代の文人に記され、マンデヴィル（1360 年頃）やジャン・ド・イプル（1351 年）ら外国でも引かれていることなどを考え合わせても、ダンテがマルコのことを知らなかったわけはない、と考えて間違いないであろう。

ところがダンテの沈黙、現世のしかも東方とはいえ、未知の世界に関するかくもユニークな情報をもたらしたにもかかわらず、ポーロのことは『神曲』にも他の作品にもいっさい登場しないことはよく知られる。では、間接的な形でどこかにほのめかされてでもいるのであろうか。誰しも考える疑問であり、事実早くから取り沙汰されてきた。

ボッカッチォとほぼ同時代のフィレンツェの民衆詩人アントーニォ・プッチに『雑録集』なる一書があり、その中に『ミリォーネ』トスカナ語訳テキストの要約が収められているのだが、その最後は以下のごとく締めくくられる:

> 数々の驚くべき事どもはこれでおくが、詩聖ダンテが次のように言っているのを思い出さずにはいられない:〈嘘の顔した真実は、できよう限り口閉ざせ、咎もないのに恥をかく〉。(Inf. XVI. 124-6) [8)]

これが、二人を関連づけた最初であるとされ、その後もこの箇所は暗にマルコのことを言ったものだとの解釈が根強く残る。そして、かの旅行のことを知っていながらそれを取り上げなかったのは、やはり当時の大部分の人々と同じく、そ

の内容が余りにも「信じ難い驚くべき事ども」であったが故である、とする説が成立することになる。それにしてはしかし、後の世の歴史に照らしてみれば、『神曲』 に書かれてあることの方がよほど信じ難い驚くべき事どもではあるまいか、との皮肉な思いは禁じえない。

もう一つ、『神曲』の中に直接求めるものとして、煉獄に登場するマルコ・ロンバルド、「私はロンバルディアびと、名はマルコ。俗世に通じ、今は誰も弓で狙わぬあの勇気を愛した」(Purg. XVI. 46-8) に比定するものがある[9)]。このマルコが誰であるか定説はなく、ロンバルディアがイタリアあるいはトレヴィーゾを含むヴェネト地方を指すこともあったとしても、この説はまともには相手にされぬようである。

2 『ミリォーネ』と『神曲』

次に、両書の接点はどうであろうか。『神曲』のいくつかの箇所が、かの旅行記と関連付けられることがある。まず何よりも南半球の知識に関わるもので、著名なオデュッセウスの航海のところに:

> 夜は今やもう一つの極の星をすべて我々にみせ、我らの極はかくも低くなって、北極星が姿を現すことはなかった」(Inf. XXVI. 127-9)[10)]

とあり、これは南半球では北極星が見えぬことを述べたものとして知られるが、その事実をヨーロッパ人で最初に記したのはマルコの書であるとされる。帰路小ジャワ島(スマトラ島)のところで:

> みなさんの誰にとってもびっくりするような事が一つあるから、まずそれを言っておこう。つまり、この島がとても南に位置するため、北極星が全く見えないという事実である。(第 181 章)[11)]

それが、セイロン島を迂回してインド西海岸コマリ国の所まで来ると:

> ジャワ島からここまでずっと見えなかった北極星が、ここから微かに見え始める。(第 198 章)

もう一つ、やはり南半球の天体に関するもので、煉獄島に着いたダンテはその

極に、アダムとエヴァの「最初の二人のほかまだ誰も見たことのない四つ星」（Purg.I.23-4）を見るし、夕刻になるとその星は地平線の彼方に没し、代わって「ここ南極を一面の炎とするあの三つのともし火」(Purg,VIII.89-90)を目にする。その宗教的・寓意的意味は別として、これらは南十字星とマジェラン雲をふまえたものであろうといわれる。

一方、旅行記には出てこないが、帰国後訪ねてきた前述ダーバノにマルコは次のように語ったと報告されている[12)]：

> ジンズの地［ザンジバル］に袋くらいの大きさの星が現れる。私が知り合ったある人は、それはちょっとした雲のように微かな光を放ち、常に南の方角にあると語った。同じ事を他の人々とともに、私がかつて知った最大の遍歴者にして熱心な探求者であるマルクス・ウェネトゥスも、その星が南極の下に見え、彼がここにその形を描いたような大きな尾を持っていること、また、南の極がまるで地上から兵士の槍一つ分の高さの所に見えたこと、一方北の極は隠れて見えなかったこと、を語った。[13)]

が、これらはいずれも、たとえヨーロッパ人として直接観察しそれを報告した最初というプライオリティーはマルコに属するとしても、ダンテがそこから取ってきたという証拠はない。南十字星や南半球の天体は古代すでにプトレマイオスの『アルマゲスト』によって知られていたし、当時は学問的にも技術的にもその分野の先進地であったアラビア・ペルシャのムスリム航海者の話やその地理書を通じてもヨーロッパに伝えられていたことが確認されている。もっとも、もしこの天体学者がかの書を読んだとすれば、これらの箇所に大いに興味をそそられたであろうことは疑いないが。

次に、これまたボッカッチォの昔からであるが、『神曲』冒頭に登場する獣ヴェルトロを、ヴェローナの皇帝代理カングランデ・デッラ・スカーラを媒介として、グラン・カーネすなわちモンゴルの大汗に結び付けようとするものがある：

> 土をも金をも食とせず、智と愛と勇を糧とし、その生地はフェルトとフェルトの間。(Inf.I.lo3-5)

というこの〈ヴェルトロ〉とは誰あるいは何であるのか、その生地という〈フェルト〉とは何処あるいは何なのか、諸説あって定まらないのは周知のことであろう。

これとグラン・カーネとの間に関連を見いだそうとする根拠の一つは、ヴェロ

ーナの皇子フランチェスコは幼少から'カニス・マグヌス Canis Magnus'とも呼ばれ、またその騎馬像と中国磁器との類似や遺品中の東方模様の布箔にみられるごとく、東洋趣味の持ち主であったことが知られ、亡命中その宮廷に世話になり、天堂にあって大いに顕彰しているダンテもそのことは十分わきまえていたに違いない、と考えられるからである。[14)]

『ミリォーネ』が、時に「騎士クビライの物語」と呼ばれるほどこのモンゴルの大汗を讃えたものであることは、今さら言うまでもあるまい。フェルトについては、彼らの宗教を説明したところで、タルタル人の地の神はナチガイ神と呼ばれて非常な信仰を捧げられており、「彼らはその神の像をフェルトとか布で作り、それぞれの家の中に安置する」(第 70 章)、と紹介している。

近年この説をさらに押し進めたのがオルシュキで、正義・慈悲・勇気・敬虔・公平・無私といったすべての徳を兼ね備えた理想の君主像は、まず当時流布していた伝説の司祭王プレスビテル・ヨーハンネースの書簡に曲来し、それが、実在するというタルタルのグラン・カーネの像と重なったものであり、そして＜フェルト＞とは事実、彼らがそのテントや家財道具や衣服や神像を造るのに使った布を指すにほかならない、と主張する。その傍証として、タルタル人の間でいかにフェルトが用いられていたかは、マルコに先立つカルピニらによっても報告されて知られており、ハイトンにも、貧しい鍛冶屋の子としてジンギス・カンが生まれたときフェルトの布に取り上げられたこと、ジンギス・カンの征服まで、モンゴル部族の物質文明はフェルトの上に築かれていたと言われていること、などを挙げている。[15)]

しかしながら、＜ヴェルトロ＞がかのヴェローナの君主のことを指すかどうかはともかく[16)]、たとえタルタルのグラン・カンのことを聞き知っていたとしても、その裏にさらにモンゴルの大汗まで想定されていたかどうか、また＜フェルト＞とは彼らの布のことであったかどうかは疑わしい。かの慎重な学者が、こうした重要な登場人物を自分の精通せぬ所から、ましてや異教の臭いのする事柄から取ってこようとは思えないからである。

最後にもう一つ、最近盛んに唱えられるのが、正義の審判の前に立たされるインド人のモデルをマルコの描く釈迦に求める説である。[17)]

キリストを知らないだけで断罪されるのは正しいか、というもっともな疑問を、ダンテは次のような形で問う：

インドゥスのほとりに一人の人間が生まれる。そこにはキリストについて語る者も読む者も書く者もいない。しかし、人間理性に照らしてみて、その思いも行いもすべて善く、その業と言葉において何の過ちもない。ただ、洗礼を受け

ず、信仰をたずして死ぬ。その彼を断罪するこの正義はどこにあるのか、彼が信仰しなかったとしても、その罪はどこにあるのか。(Par.XIX.70-8)

一方マルコの釈迦牟尼、徳高く行い優れた＜セルガモニ・ボルカン＞Sergamoni Borchan については、次の有名な一文が知られる：

もし彼がキリスト者であったなら、きっと我らが主イエス・キリストとならぶ偉大な聖者となつていたことであろう。(第 179 章)

が、ダンテがここにインド人を持ってきたのは、インドとは非キリスト教世界を代表する'世界の果て'、文明の中心キリスト教世界から最も遠い所、のトポスだったからにすぎない。いはば宗教的には自紙の、問題を設定するに最もふさわしい所だったからである。また確かにこの＜セルガモニ＞は、中世ヨーロッパ人にしては珍しく宗教的偏見に凝り固まっていなかったマルコにして初めて書きうるものであろうが、賛美されているのはその徳性だけであり、そのすぐ後には「彼は八十四回死に、最初に死んだときは牡牛に生まれ変わり、次に死んだときは馬になった、云々」と、キリスト教徒が最も忌み嫌う偶像崇拝にまつわる記事が続いており、戦闘的な正統カソリック教徒であり、厳格な神学理論家であったダンテが、たとえイメージだけとはいえ、こうした全体から一部だけを借用することはありえなかったであろうと思われる。このインド人には、ありきたりながらやはり、ギリシァの昔から記され、中世にはアレクサンデル伝説によって伝えられた、その無欲で高潔な暮らしぶりで知られたバラモンのイメージを求むべきであろう。

以上が、わずかながら両者の接点として取り上げられるものである。といっても、この二つの線が交わっているという確かな証拠はなく、時を経て振り返ってみたとき、角度によっては交わっているかに見える、といった推測の域を出ないものであった。また、いずれもマルコ・ポーロ側からのもので、ダンテ研究者の側からは否定されるか無視されるのが常である。[18)]

両者はむしろ、ほぼ同一の時間と空間を共有しながら、その描く軌跡がおよそ対照的である点が強調されることの方が多い。すなわち、共に当時の人々に未知の地平を開示したスケールの大きい'旅人'であるが、一人の旅が、天地創造の過去から最期の審判の下る終末の未来までの時間に沿って、地獄・煉獄・天堂の三界を想像と知識の翼をかって駆け巡るという思弁的なものであったのに対して、もう一人の旅はユーラシア大陸の地表に沿って二十五年の歳月をかけてひたすら自分の足で辿るという文字どおり現実的なものであった。十六才にしてはや旅に出

たヴェネツィアの一商人の息子にとって、前者の輝かしい学問と教養はとうてい及ばぬものであったと同じく、古典の学識と神学教義の世界に棲むフィレンツェの詩人にとって、後者の生きたアジア、そこにあふれる事物と人々はおよそ縁遠いものであったし、前者の宗教的・文明的ドグマティズムと後者の相対的経験主義はおよそ相容れぬものであった。

では、この中世最後を飾る大知識人にとっての東方オリエントとは、どのようなものであったか。

3　ダンテの東方

ところが、これから見ていくが、確かに『神曲』では著者はオリエントには全くと言っていいほど関心を示さず、そのイメージは全体として基本的にはヨーロッパに伝統的な東方像を一歩も出るものではなく、ボッカッチォやサッケッティら同時代の文人と較べても、登場する事物も数えうるほど僅かなのであるが、そのわずかな事象に関してはどうも慎重に選んだふしがあり、その知識は、宗教的な彩りを取り除けば、古典の典拠と権威に則りながらも意外と正確で近代的なのである。

地球像からしてすでにそうである。平板な大地という教父地理学や東を上とするTO図はとっくに捨てられ、古代には南半球を取り巻いてきた未知の大陸を取っ払って大洋とし、しかもどうやらその半球の天体にも通じている様子であった。その上、オデュッセウスの船旅をもってして西方航海をも予言していた。

問題は煉獄島である。かつては莫然と冥府として地獄の上層やあるいはエトナ山やアイルランドの山の地下に想定されていた煉獄を、もっとも場所としての煉獄の誕生はわずか百年余り前、十二世紀末のことだそうであるが[19]、ダンテはこの地球上、エルサレムの対跡地に島として出現させる。南半球はしかし、「人棲まぬ世界」であって、現世の人間が近づくことは許されない。そこで、聖墓の下に広がる地獄の最深部、地球の中心からレーテの河の流れを伝ってそこにたどり着く一方、'地上の'と言われる限りこの地球上になければならぬが、それがどこかぼんやりと東方としか想定されていなかつた'地上の楽園'をその山上に置き、そこから'天上の楽園'へと昇ってゆける構造にする。

かく、この独創的で明快なコスモグラフィーによって、地獄・煉獄・天国という彼岸の世界の三極体系を美しく完成させ、現世と来世の地理学を論理的・合理的に一貫したものとしたまではよかったが、この点ではダンテの遺産は近代に継承されなかった。その後の探検航海 によって地球は丸裸にされて煉獄島は姿を

消し、地上楽園は再び東方のどこかに漂うこととなったからである。もっとも、煉獄島をオーストラリアか南極大陸の予見と考えられないこともないが。

とまれ、かくしてすっかり身軽になった北半球ユーラシア大陸は、エルサレムを中心とする点ではまだキリスト教的だが、ギリシァの昔からのリーフェイ山脈を北限、赤道直下のリビアあるいはエチオピアを南限、エブロ川やカディス島のスペインを西限、そしてお馴染みのインドを東限として、それぞれ西東に九十度広がることになる。一方古代ローマ、プリニウスやプトレマイオスには知られていたセリカの国（中国）やシナの地（インドシナ）、タプロバーナ島（マレー半島）は存在しない。

かといって、必ずしもダンテがそれらを知らなかったとは言えない。例えばセレスは、古代の師ウェルギリウスの『農耕詩』（前 29 年）に、世界各地の著名な樹本、インドの黒檀・サバの乳香とバルサム、エチオピアの綿などと並んで絹に言及したところに、「セレスびとが葉から梳き取る薄い綿」(II.121)20)、と出てくるし、同時代の師ブルネット・ラティーニの『宝典』（1266 年頃）にも、プリニウスそのままの引用だが、もちろん欠けてはいない。その第 122 章「東方なるアジアについて」では、エジプトから始まってメソポタミア地方・カスピ海沿岸・バクトリア地方と続き、その東に広大な無人の平原がある：

> そのさらに彼方に'セレス'と呼ばれる人々が棲んでおり、彼らは水に潰けた樹の葉と皮から綿を取り、それで衣服を作る。彼らは自分たち同士では互いに親切で平和的だが、外の人と交わるのを嫌う。彼らは我々の商品を欲せず、自分たちの物をこちらの商人に売るのだが、その時一言も言葉を発しない。彼らは自分たちの品物に値段を書いた札を貼って川堤に置く。我々の商人はそこに書かれた金額を置いて、その品物を持ち去る。[21)]

セレスの名こそ出てこないが、博識の自然学者ダンテは、遥かなその国からやってくるという、黄金にもまして貴顕の士に尊ばれた絹はもちろんながら、その製法まで正確に知っていた。天堂で一人の至福者が神の光に包まれている様は：

> 己が絹で身をくるむ虫のごと、周りに輝きを放って身を包む我が歓びが、そなたの眼から私を隠す。(Par.VIH.52-4) [22)]

絹の代名詞と化し、中世には徐々に忘れられてしまったセレスに対して、十二・三世紀に入るともう一つの名'カタイ'が伝えられ始める。その名は登場しないが、十三世紀に突如として現れた新興勢力'タルタル'の名は聞こえて いた。もっ

とも、ダンテの東方は国や民族、歴史や人間であることはなく、ここでも物、東方産の織物を通じてである。地獄の怪物ジェリォーネの体の紋様は：

タルタル人もトルコ人も、地と紋のかくも多彩な織物を作ったことはない。(Inf.XVII.16-7)[23]

絹と並んで古来から名高い東方の産物、香辛料もわずか一個所に顔を出すだけだが、これについてもかなりの程度に通じていたことをうかがわせる。隣のライヴァル都市シエーナ人の美食ぶりを挙げつらって：

そうした種がよく育つ菜園で、丁字の贅沢な用い方を初めて編みだしたニッコロは・・・・…違う。(Inf.XXIX.127-9)

他に、東方を代表するインドにまつわるのは、地理上の知識としての「インダス川」や「ガンジス川」(Purg.XXVH.1)以外、アレクサンデル王遠征によって伝えられたその「酷熱」(Inf.XIV.31-9)[24]、ウェルギリウスも記している「高木の森」(Purg.XXXH.40-2)、黒檀とおぼしき「銘本」(Purg,VII.74)[25]、などである。

以上が『神曲』に登場する東方のほぼすべてであり、一方それらとともに伝統的な東方像を形成していた他のお馴染みの事項は顔を出さない。例えば、同じアレクサンデル王伝説でも'鉄門'や'太陽の樹'、聖書にも名高い'ゴグ・マゴグ'、インドゆかりの'聖トマス'[26]、そして十二、三世紀大いに流布した'プレスビテル・ヨーハンネース'や'山の老人'などである。これらについてもまた、かの詩人が知らなかったとは考え難く、現に、近年ではその作と認められる『イル・フィオーレ』の冒頭、愛の神に矢で射られた恋人は：

あなたにもちろん、偽りなき清き忠誠を捧げますとも、アッサッシンの長老に、プレスビテルの神にもまして。(II.9-11)[27]

と答えている。

4　おわりに

『神曲』の東方は、ギリシャ・ローマの古代から中世にわたって受け継がれてきた伝統的なその像を越えるものではなかったし、否むしろ項目的には貧しくさ

えなっていると言ってもよい。かつては東の果てに設定されていた地上楽園は南半球に移されたし、百年前の「プレスビテル・ヨハンネスの書簡」を賑わせていた'東方の神秘と驚異'、犬頭人や一本足人らの怪物・妖怪変化、象や河馬など珍しい動植物、そして何よりもヨーロッパ人を魅惑した莫大な金銀財宝、といったものも顔を出さない。その他、スキタイ・アマゾネス・バラモン・聖トマスの墓らも出てこない。また、当時アラビア・イスラムの船乗りたちによって、あるいはモンゴル帝国成立後、ひと昔前のカルピニ、ルブルクらの宣教師やポーロを代表とする商人たちによってもたらされた情報も、そのままの形では採り入れられていなかった。

だからといってしかし、ダンテがそれらをあるいは東方を知らなかったとはいえないことはすでに見た。セレスは、確かに存在することは間違いないにしても、絹の産地として以外はそれがどこか、とりわけインドよりさらに東に位置するものかどうか、学問的に確定していなかった。実際、ウェルギリウスでも、頻出するインドに対してセレスは一度きりだし、『アエネーイス』には出てこない。ラティーニでも、その後さらにインド・タプロバーナ・紅海・メディア・バビロン・エルサレムと、混乱のうちに巡回し，どこが東の果てか定かでない。また、プトレマイオスの『地理学』がヨーロッパに紹介されるのはずっと後、十五世紀初め（1406 年）のことだった。その他、例えばゴグ・マゴグや鉄門は、地上楽園が東方から煉獄島に移されることによって、伝説では長城を構えてそこへの接近を阻んでいた悪の帝国アンチクリストの民はその存在理由を失ったし、彼らを高山の彼方に閉じ込めておく鉄の門も必要なくなった。「日の昇る所からバビロンまで」を支配し、莫大な富を有するというプレスビテル・ヨーハンネースも、ルブルクやマルコによってその正体が暴かれ、存在は疑問視され始めていた。[28)]

十三世紀も後半に入ると地球は、なお中世的・宗教的色彩を色濃く残しながらも、もはやかつての怪奇や幻想や奇跡に満ち溢れた黙示録的伝説の世界から、十字軍士や宣教師、船乗りや商人によってもたらされた情報に基づいて、混乱のうちにもしかし確実に次第に現実に近い形で新しいイメージが形成されつつあった。そして、かつてはそれらを一手に引き受けていた'神秘と驚異'の東方オリエントも、通商・探検・伝道の対象となり始めていた。ダンテの宇宙像もまたそうした新しい時代の産物であり、東方についてもそれが消極的な方向、つまり、疑いの眼で見られ始めた数々の伝説や曖昧な事象は拒け、絹や香辛料らそこからもたらされる物資によってあるいは古代からの典拠と権威によって確証されるもの以外は言及しない、という形で反映している。この点、疑わしきは採らなかった学者ダンテは、後世からすると正しかった。

というより、作者はそれらを必要としなかった、『神曲』の構成にとって不可欠

ではなかったというべきでろあう。よく言われるごとく、『神曲』は壮大な世界誌ではあっても百科辞典ではなく[29]、ましてや東方地理案内ではない。至上の高みにまします神のもとへと三界を経巡るこの宇宙旅行記にとっては、現世地球は「来世への渡し場」でしかなく、天上から眺めた東方には、その境界を定めるインドさえあればよかったのである。

人間についても同様である。ダンテにとって問題なのは、この世にどんな人種が棲んでいるかではなく、その霊魂が次の世でどこに往くかであった。非キリスト者はすべて異教徒であり、十字に敵対するマホメットの徒か文明なき蛮族の民のどちらかである。しかも、普遍を旨とするキリスト教は、お節介にも、彼らにも等しく原罪の刻印が捺されているとする。福音を伝道され救済されて、その印しを洗い礼してもらわぬかざり、死後は地獄行き、よくても辺獄止まりである。その運命を象徴するのが、かの正義の審判の前に立たされるインド人に他ならない。ダンテにとって、この世に生きる無数の異教徒を代表さすに、この一人のインド人で十分だった。もっとも作者は、彼が死後どのような運命を辿り、その魂がどこに置かれるかは必ずしも明確にはしていない。後世の歴史に照らしてみれば、宣教という名の下に侵略・征服され植民地化されて、救済と平安の代わりに略奪と殺戮を被ることになるのであるが。

しかし、登場さすか否やはさておき、当代きっての知識人ダンテは、東方にまつわる事象についても十分に詳しいことが窺えた。絹の製法については、当時最高の百科辞典と言われたにもかかわらず、「水に漬けた樹の皮から採る」と、千年来の俗説をそのまま繰り返している師ラティーニ『宝典』の記事と較べて、それが蚕によって紡ぎ出されるものであることを正確に知っていたし、香味料、丁字の栽培法についても何やら通じている様子だった。タルタルについても、その名で知られる織物に限ったダンテは、その起源を相変らずゴグ・マゴグの伝説に結び付けている後代のヴイッラーニに比べて、ここでも慎重であった。

とすると、彼に言及する、あるいはそこから情報を取り込むかどうかは別として、ポーロとその書のことは聞き知っていた、あるいは写本の一つくらい目にしたことがあった、いや確かに読んでいたと推測しても決して大胆過ぎることはあるまい。その情報を採り入れなかったのは、古今の典拠と権威に基づいて確固として打ち立てた自らのコスモグラフィーは、同時代の一介の商人旅行家の不確かな情報によって揺るがされるごとき脆いものではなかったからである。たとえその旅行記に書いてある事がすべて本当であったとしても、単なる事実の列挙であって学ではなく、理論と思想の裏付けを欠いていた。と同時にまた一方、マルコにより現実に経験された数々の事実を真理と認めるには、科学的かつ哲学的に考案された自らの地球像を否定せずには済まなかったからである。

しかしながらである、とすると、次のように想像してみる誘惑にかられる。まず第一に、すでにみたごとくダンテの地球は、その宗教的色彩を消し去ると意外に近代的なものであった。地球は球形で、南半球は大洋が取り巻き、ユーラシア大陸は東西が限られ、その東の果てに地上の楽園なんぞない、と。ダンテはこれを誰から知ったのであろうか。恐らく当時のアラビア人の航海やその地理書からであろう。ところがもう一人、同時代にその事実を自らの体験でもって証明した同国人がいた。もちろん、そこに記されている個々の事実をすべて信じ、易々と取り込むほどダンテは軽薄ではなかった。むしろ厳しい疑いの眼で見、信を置かなかったであろう。少なくともしかし、マルコの旅そのものが虚構ではなく実際に行われたものであり、それまで伝説やそこからやって来るという珍奇な品々を通じてしかぼんやりと伝えられていなかった、自分もしかとは通じていぬ未知の世界の確かな存在とその驚くべき現実を当時の人々に知らしめるものであることは、直感的に気付いていたのではないか。それをも否定するほど、また鈍感でもなかった。

件の詩句をもう一度思い起こしてみよう:「嘘の顔した真実は、できよう限り口閉ざせ、咎もないのに恥をかく」と。これがもしマルコのこと言っているのなら、素直にとれば、かの旅と書を事実と認め、その引き起こす災いを気遣っての言ではないか。現に、マルコから話を聞き、その経験した事実をもとに南半球でも人間が生息可能であることを主張した学者ピエトロ・ダーバノは、異端の嫌疑を掛けられて処罰され、二度とその名誉を回復されることはなかった。ちなみに、かのインド人の断罪をめぐるダンテの問に対する正義の霊たちの答えは、'神意は人智には測り難い'(Par.XIX.97-9)、というものであった。ダンテの最後の著、カン・グランデに捧げられた『水陸論』もまた同じ言葉で結んである[30)]。

西へと向かった古代の旅人オデュッセウスが地獄に堕とされ、神への謀反の罪に問われたのは、南半球に船乗り入れ、現身のままに地上楽園のある煉獄島に近づいてはならぬとの神の掟に背いたからではなかったか。少し前海路インドに渡らんと西方に船出したヴィヴァルディ兄弟の運命もそのとおりとなった。であればである、陸路ではあるが彼らとは反対に東へと向かい、やはり現身のままにその果てに至り、なおその彼方にあるという黄金島ジパングを望見し、インドに足跡を印し、あまつさえ南半球を航海してぬけぬけと還ってきたという現代の旅人マルコ・ポーロも、同じ罪に問う必要はなかったか。

ジパングは『神曲』にはもちろん登場しない。ただ、'ダンテの沈黙'に意味があるのかどうか、マルコを意図的に無視・黙殺したのかそれとも関心がなかっただけなのか、また煉獄島を南半球に出現させ、その山上に地上楽園を東方から移し

たのは何故なのだろうか、と考えているうちに、中世の幻想とやらに取り付かれ、ダンテは、「東方、大洋の彼方に大島あり」とのマルコの文に想を得たのではないか、そこは楽園にも比すべき「黄金の島」だとあるではないか、とすればかの煉獄島とはジパングのことではあるまいか、と思えてきたのである、ということにしておこう[31]。マルコ・ダンテの両先生もお咎めにはなるまい。いや、「嘘の顔した真実は」なんとやら。ならば、この一文を奉る、この度煉獄を停年退官して天国に参られるとかの聖(キヨシ)イケダの審判の下に委ねることとしよう。やはり、「天意は人知には…」と？

1 初出：『池田廉教授停年退官記念論文集』大阪外国語大学、1993、pp. 45-64。拙稿「ジバングの系譜―マルコ・ポーロ研究序説」『愛媛大学教養部紀要』第 21 号 1988、pp. 65-91、と部分的に重なるところのあることをお断りしておく。

2 ラヴェンナとダンテについては、cf. Desiderio Pasolini, 'Dante a Ravenna', *Lectura Dantis*, Firenze Sansoni, pp. 73 sgg..

3 L. Olschki, 'Marco Polo, Dante Alighieri e la cosmografia medievale', *Oriente poliano,* Roma IsMEO, 1954, pp. 45-66.

4 腹違いの弟マッテオ、庶出の弟ステーファノとジョヴァンニーノ、甥のマルコリーノらがかなりの規模で商業活動を行っているのが記録に見えるのに対して、解放後四十代半ばと、肉体的にも精神的にもまだ引退する歳でもないのに、マルコが大々的に商売に携わった形跡はない。資金上あるいは健康上何らかの支障のあったことが考えられるが、前者とすれば、帰路トレビゾンダでギリシャ政府に財産を没収された、かのポーロの館の購入にあらかた消費した、再び東方貿易に出帆したところがジェノヴァ艦隊との交戦に敗れて喪失したなどが、後者とすれば、ラムージョの語っているごとく、その戦闘で実際に負傷した、などが考えられる。その後の古記録にうかがえる吝嗇で陰気な生活振りや、もっぱら旅の体験を語って暮らしたとの噂からすると、後者の蓋然性が高い：cfr. 拙論「ラムージョ ＜マルコの書序文＞ ―マルコ・ポーロ伝記研究」『愛媛大学教養部紀要』第 24 号 1991、pp. 53-106.

5 グレゴワール写本(FG)にそのような書き込みがあるだけで、直接譲り受けたかどうかは確証されない。ティボーが 1307 年フィリップ美王の弟シャルル・ド・ヴァロアの命により、ルーマニア問題解決のためコンスタンティノープルに赴く途上ヴェネツィアに立ち寄ったことは確認されている：cfr. L. F. Benedetto, *Il Milione*, Firenze Olschki 1928, pp. lvi-lx.

6 『デカメロン』第六日第十話、著名なチポッラ修道士の「太陽の昇る国」への旅行と

いうのは、マルコの旅のパロディーであることが知られる。

7 ジョヴァンニ・ヴィッラーニ（1280-ca.1348)『年代記』第 5 巻第 29 章「タルタル人がゴグ・マゴグの山から降りてきた次第」:

「クリストの 1202 年、タルタルという名の者どもが、ラテン語でベルゲン山と呼ばれる山から出てきた」との文に始まり、彼らはイスラエルの失われた支族の裔であり、アレクサンデル大王によってそこに閉じ込められたものである、同王は風が吹く度に大きな音で鳴る巨大なラッパをその山上に建設して、自分たちの軍がいつも見張っているように見せかけておいたのであるが、ある時フクロウがその中に巣を作ったため鳴らなくなり、様子を見に来たタルタル人にそのからくりがばれ、かくて彼らは山から出て下のインドに襲来した、彼らの首領はカンジゥス cangius〔チンギス〕という名の貧しい鍛冶屋で、フェルトの上に持ち挙げられて皇帝となってカーネを名乗った、彼はプレスト・ジョヴァンニを破ってインドを征服し、アジアに世界最大の帝国を築き、巨大な富と力を有し、ヨーロッパに侵入した、といった記事の後、次のように結ばれている:「彼らの歴史をさらによく知りたい者は、教皇クレメンス五世の依頼により著したアルメニア・コルコス君主ハイトン修道士の書、それにまた、永く彼らのもとにあり彼らの力と支配について多く語っているヴェネツィアのマルコ殿の『ミローネ』なる書を調べられるがよい。さて我々はタルタル人のことはこれで切り上げて我々の主題フィレンツェの歴史に戻ることとしよう」。*Cronica di Givanni Villani*, Frankfurt 1969 (Firenze 1844-5), pp. 209-11. Yule-Cordier, *The Book of Ser Marco Polo*, Philo Press 1975, vol. I, pp. 119-20。第 5 巻はフェデリーコ一世の皇帝即位（1154 年)から 1220 年までを扱うが、同書の執筆開始は 1320 年前後とされる。

8 L. F. Benedetto, *op. cit.*, pp. Lxxxv-ix.同要約はトスカナ語写本 TA[1]を底本とすること、要約者の情熱的な人柄が反映されており、ジパングでの敗北もグラン・カン側の勝利に変えられていること、などが知られる。Antonio Pucci (1309 ca.-88)：ヴィッラーニの年代記の記事を詩文化した『百話集』*Centiloqui*,『雑録集』*Zibaldone*,『詩集』*Rime*、などがある。

9 Cesare Augusto Levi, 'II Vero segreto di Dante e Marco Polo', Treviso Zoppelli 1905, pp. 37（この論文、1905 年 11 月 17 日トレヴィーゾ・ダンテ協会講演会での発表原稿、は東洋文庫渡辺宏氏の教示による。）

10 テキストは、*La Divina Commedia*, a cura di Tommaso Di Salvo, Zanichelli 1987, 以下同。

11 テキストは L. F. Benedetto, *op. cit.*, 以下同。

12 Leo Olshki, art. cit..

13 『哲学者殊に医学者の相違調停者』*Conciliator differentiarum philosophorum*

precipueque medicorum (1303 年)の「相違第六十二：赤道下に生息可能か否か」。さらに以下の文が続く:「また、そこから私たちの所へカンフォラ［樟脳］・アロエ・ブラジルの樹が輸出されると語っていた。そこはまた暑さ厳しく、住民は少ないと証言している。これらは彼が海路至ったある島でみたものである。またそこには大きな人間と、我々の所の豚のように太く剛い毛をした非常に大きな山羊がいると語っている。そこへはまた、このように海から以外近づくことはできないと言っている」。他に『アリストテレス問題釈義』*Espositio problematum Aristotelis*,「第十六部問題その八：熱暑地にいる者は臆病で寒冷地にいる者は勇敢なのは何故かについて」でも、「また私は、赤道を越え、この辺で見かけるよりも大きな人間に出会ったマルクス・ウェネトゥス氏から、その地では身体を凝縮させ、したがって小さくする寒さは見出されないと聞いた」とある：cfr. L. F. Benedetto, *op. cit.*, pp. ccxii-iv; L. Olschki, art. cit.. ; Id., *L'Asia di Marco Polo*, Sansoni 1957, pp. 32-7.

ピエトロ・ダーバノ Pietro d'Abano (1257-1315ca)：当時著名な医学・哲学者、長くコンスタンチノープルやパリに旅行、14 世紀初パドヴァ大学教授。天体現象を研究し、人間界の事象をその影響の下に説こうとしたため異端の疑いで審問、1315 年訴えられ断罪、死後も埋葬されることはなかった。宗教的啓示に対する理性的真理の優位を説くアヴェロイズムの徒だったとも言われる。ダンテに対する影響を論ずる者もある（B. Nardi)。『神曲』では、アヴェロィス(1126-98)は偉大な注釈者として、アヴィセンナ(980-1037)らとともに辺獄で顕彰されている（Inf IV.144)。

南十字星とマジェラン雲の初期の記述としては、喜望峰沖でこれを観察したフィレンツェの航海士アンドレーア・コルサーリ(生没年不詳)のジュリァーノ・メディチ宛報告（1516 年 1 月 6 日付、図解つき):`Due lettere dell'India di Andrea Corsali, G. Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, vol. 2, Einaudi 1979, pp.21-2.や、やはりこの星（「ほとんど動かない、アーモンのような形をした四つ星」)を見たアメリーゴ・ヴェスプッチが、ピエルフランチェスコ・デ・メディチ宛書簡（1500 年)で、ダンテの詩を想起して報告していることが知られる。また、ラムージォと友人フラカストロの往復書簡に、ダンテが描いているのは南十字星かどうかを論じたものがある：A. del Piero, `Della vita e degli studi di G. B. Ranmusio',《*Nuovo Archivio Veneto*》IV, 1902, p. 34.

14　Ruggero Ruggieri, *Marco Polo Il Milione*, Olschki 1986, p. 342.ボッカッチォ自身はこの説に懐疑的とのこと。〈フェルト〉の解釈としては、地理的にヴェネツィアの Feltre とロマーニャの Montefeltro ととって、その間に生まれた者とする説、投票箱を繋ぐ布ととって選挙で選ばれた皇帝とする説、フェルト帽を被っている双子座のディオスクロイととってその星の下に生まれた者とする説等、数多い：cfr. *Enciclopedia Dantesca,* Roma 1970, vol. 2, pp. 833-5.

15 L. Olshki, *Storia letteraria delle scoperte geografiche,* Firenze Olshkl 1937, pp. 209-13.同著者にはこの問題を論じた *The Myth of Felt*, Univ. of California Press 1949、がある（未見）。

16 カーネ・デッラ・スカーラは、『デカメロン』第一日第七話にも主人公として登場する。同書には、「タルタルかインドの織物 drappi tartereschi o indiani」（VI.10.23)、「アルタリージ［アルタイ?]のグラン・カン il gran can d'Altarisi」(VIII. 9. 35)、「カッタィオ Cattaio」(豪族ナタンの地、X. 3. 4)などの語もみえる。

17 Giuseppe Tucci, 'Marco Polo',《*L'Italia che scrive*》XXXVII, 1954, pp. 107-11（ローマ・イズメオ主催 1954 年マルコ・ポーロ生誕七百年記念講演会原稿)。他にも L. Olschki, art. cit, p. 57; R. Ruggieri, *op. cit.*, p, 83-4; Mario Busssagli, `La grande Asia di Marco Polo', *Venezia e l'Oriente,* a cura di A. Zorzi, Milano Electa 1989, pp. 213-4.

18 その他、作品の影響関係とは係わりないが、両者にまつわるエピソードとして、姓ポーロ Polo（Paulus より）とのつながりから家紋にも用いられている鳥＜ポーラ pola＞（コクマルカラス・ミヤマカラスなど小さい種類の鳥を指すヴェネト方言）の語が『神曲』でも用いられていること（Par. XXI. 35)、『ミリォーネ』の最も古い写本の一つフィレンツェ国立図書館蔵の TA[1] には、1309 年に死亡したニッコロ・オルマンニ Niccolo Ormanni なる人物の筆写になる、との書き込みがあるが、オルマンニ家は同市の古い貴族でダンテにもその名が挙げられていること(Par. XVI. 89)、などがある。この事実は、すでにこの頃フィレンツェにもマルコの写本が出回っていたことを傍証する。

19 ジャック・ル・ゴッフ（渡辺・内田訳)『煉獄の誕生』、法政大学出版局 1988。著者によれば、ダンテの煉獄はその「詩的勝利」(pp. 500-46)。トマス・アクィナスでは煉獄は地獄に隣接した地下に想定されているとのこと（同 p. 408)。

20 <velleraque ut follis depectant tenuia Seres ?>; P. Vergili Maronis, *Georgicon*, ed. F. A. Hirtzel, Oxford Univ. Press, 1972;河津千代訳『牧歌・農耕詩』未来社 1984、p. 236。ローマ時代にはよく知られていたものとみえ、例えばペトロニウス『サテゥリコン』(ca. 65)にも、ローマが世界に覇を唱えていたことの証しとして、「このヌミディアからは大理石の装飾細工が、あの中国(ちなス)からは新奇な絹織物が求められ・・」(「内乱詠史」国原吉之助訳、岩波文庫 1991, p. 235)とある。

21) Brunetto Latini, *Li libres dou tresor*, par F. J. Carmody, Geneve Slatkine Reprints, 1975, p. 113.近代語訳は、Ch. V. Langlois, `Le livre du tresor', *La conaissance de la nature e du Monde,* Tome III, Slatkine Reprints 1970 (1926-8), pp. 360-1。プリニウスのセレスは、中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』I、雄山閣 昭和 61 年、pp. 258, 265。Cfr. 拙論「ジパングの系譜」(二)『愛媛大学教養部紀要』第 23 号、1990、

pp. 19-60.

22　生糸がなにか虫から取れることはすでにアリストテレスに伝えられており（ただし小アジア産)、それが直接の典拠と考えられるが、後代のウェルギリウスやプリニウスを捨てて前者を採ったのは、ダンテが他のなんらかの確証、事実か文献、を得ていたことを推測さす。西方におけるセレスからカタイへの変遷については、Yule-Cordier,*Cathay and the Way thither*, vol. l, Kraus Reprint 1967 (1913-6)。＊［「プレスビテル・ヨーハンネースの書簡」にも、サラマンダーという火の中でのみ生きる虫にまつわって、「絹を作る別の虫のように自分の体の回りに皮をめぐらす」との文が見える(42-43)。］

23　この「タルタル人の織物」を、寄寓先のヴェローナの宮廷で目にしたであろうカン・グランデ所有の'東方産の布'に結び付ける人もいる。しかし、13 世紀頃から中国絹布がかなり出回っていたことは様々な資料に記され、例えば、1304 年に死亡したベネディクトゥス十一世の亡骸は、真偽はともかく、「タルタルの君主から教皇に贈られたサラマンダーの布」、元朝の織物で被われた、と伝えられる: Jurgis Baltrusaitis, *Il Medioevo fantastico*, Adelphi 1988, p. 197。『デカメロン』の例のチポッラ修道士の「タルタリかインドの織物」は、ダンテから取ったもの：cfr, *Decameron*, a cura di V. Branca, Einaudi 1987, p. 766。同書には絹の話は多い（I. 2; II. 9; III. 7; IV. 6; V. 2; IV. 10: X. 6 等)。ちなみに、この表現はチョーサー『カンタベリ物語』にも受け継がれ、「インド王エメトレウス大王」の陣羽織は「韃靼の織物」(西脇順三郎訳、ちくま文庫 1987、上、p. 80。原文'Cloth of Tars': Oxford Univ. Press, 1976, p. 446)。

24 中世におけるアレクサンデル伝説については、Paul Meyer, *Alexandre Le Gran dans la litterature francaise*, 2 vols, Slatkine Reprints 1970 (1886); E. H. Haight, *The life of Alexander of Macedon by Pseudo-Callistenes*, New York Longmans Green 1955.

25 前述『農耕詩』のセレスと同じ箇所に、「インドだけが真っ黒な黒檀を産し」(H.116-7),「太洋により近いインドの密林、そこは地球のはずれの一角で、いまだかつてどんな矢も、空を切って樹の天辺に達したことはなかった」(II. 122-4、河津訳 p. 236) とみえる。これらはダンテの詩句の直接の典拠と考えられる。

26 聖トマスについては唯一、カッチァグィーダがフィレンツェの過去を語るくだりで、「偉大なバロン」トスカナ侯爵フーゴの命日（1006 年 12 月 21 日）がその祭日に当たることが述べられる（Par. XVI. 129）だけで、インドとの関連はない。

27 <I'si son tutto presto / di farvi pura e fina fedeltate, / piu che Assassino al Veglio o a Dio ll Presto> (II. 9-11). 'Il fiore', *Dante Tutte le Opere*, Sansoni 1981, p. 737. 『ノヴェッリーノ』では、＜プレスト・ジォヴァンニ Presto Giovanni＞が第二話に、＜山の長老 Veglio＞が第百話に、いずれもフェデリーコ二世の相手として登場する：

Il Novellino, Rizzori 1975, II, pp. 13-5, C, p . 107.

28 Cfr. 拙論「ジパングの系譜」(二)。

29 聖者ではサン・ジゥゼッペが登場しないことが知られる。

30「やめるがよい、人間たちよ、己が能力を越えたことを知ろうとするのはやめるがよい。……最後に、造物主の声に耳傾けるがよい、＜私の赴くところ、おまえたちには付いて来るのは無理なのだ＞。神により定められた真理の探究に対してはこれで十分だ」：'Questio de acqua et terra', XXII, *op. cit.*, p. 384.

31 マルコの書のパロディーは昔から数多いが、ごく最近の Paul Griffiths, *Myself and Marco Polo*, New York Random House 1989 も、獄中でのマルコとルスティケッロの対話に場面を設定し、無味乾燥な事実ばかりの前者の旅行談に、後者が空想の羽を展げるという構成を取っている。